

「若手教員の授業力向上に向けて」

研究代表者 和歌山大学教職大学院 中山 眞弘
 共同研究者 有田川町立藤並小学校 福田 雄太、山田 千尋、新田 真子、山本 郁哉、
 上田 莉穂、新谷 知咲、松本 奈穂
 有田川町立藤並小学校（和歌山大学教職大学院生） 九鬼 正志

1. はじめに

現在、教育現場ではいわゆる団塊の世代の大量退職に伴い、20代の若手教員が急激に増えてきている。一方、その若手教員を育てるべきミドルリーダーを担うべき年代の教員が少なく、若手教員の育成が十分できていない現状だと言える。初任者教員に対しては、初任者研修等実施し現代の教育課題に対する研修を進めているが、実際に授業力をつけていけるのは現場での経験とその中での研修によって得られる効果が大きい。実際、授業力が身につかず、教員としての資質向上が図れないがためにバーンアウトする教員も少なくない。特に、中・大規模の学校では毎年のように初任者が配属されることからその影響は大きい。今回、昨年度から引き続いての研究校である有田川町立藤並小学校も有田地方では最大規模の小学校で、若手教員が毎年のように採用されてきている。そうした現状から、本研究を進めるにあたって、若手教員の授業力改善と中堅経験者教員をそのコーディネーター役として本研究を進める立場としたミドルリーダー育成の両面において取組を行った。

2. 学校概要

藤並小学校は、有田川中流に位置し、近くにはJRの駅や高速道路のICがあるなど、交通の便が発達していることから、近年新たな住宅も増え児童数も有田地方最大規模の小学校となっている。そのため、学校の課題としては多様な課題を抱えた子どもが在籍することから、集団づくりに力を入れている。研究主題に迫ることを目指すため、教職員の学年や学級などの経営能力を高め、やる気を引き出す指導により、学力を向上させていく実践に取り組んでいる。また、6年生の教科担任制やセットアップ学習・オリエンテーション・学年集会や学年杯など特色ある取り組みを行ったり、児童会や学級会など自治活動を活性化させたりして、自分たちで学校生活を楽しく豊かなものにしていく活動を重視している。

【研究主題】

「やる気の研究」 ～主体的・対話的で深い学びを目指して～

【児童数】

学年		1年	2年	3年	4年	5年	6年	支援	計
児童数 (人)	男子	59	44	54	51	40	49	16	313
	女子	53	56	47	57	34	48	4	299
	計	112	100	101	108	74	97	20	612

【職員数】(人)

学校長 1、教頭 1、教員 32、養護教諭 1、職員 17 計 52

3. 活動内容

3.1 事前準備

【事前訪問】平成30年7月23日(月)

事前訪問では、今年度の学校体制を確認し、そのことを加味した上でこれからの研究体制について管理職と懇談を行った。その結果、昨年度までの研究を引き継いだ上で、昨年度の成果を生かした研究が進められるような体制にすることにした。研究体制は以下の通りである。

〈研究コーディネーター〉

教職経験11年目教員（昨年度から継続）・・・ミドルリーダーの育成

教職経験13年目教員・・・現在、和歌山大学教職大学院に在学中

〈若手教員〉

教職経験4年目教員（昨年度から継続）・・・次期ミドルリーダーの育成に向けて

教職経験2年目教育（昨年度から継続）

初任者教員 2名、講師 2名

以上 8名

3.2 研究授業

【第1回研究授業】平成30年9月26日(水)6限目 授業者：山田 千尋（4年目教員）

学年・教科領域： 第5学年 算数科

単元名：整数

展開：

	学習活動・内容
導入	① 1分間チャレンジ（約数・倍数） ② 問題を知る ③ めあてを知る あまりが出ない分け方を考えよう
展開	④ 自力解決 ⑤ 集団解決 ⑥ 練習 ⑦ 答え合わせ
まとめ	⑧ まとめ ⑨ 確認プリント ⑩ ふりかえり



第1回目の訪問では、まず今年から新たに加わった若手教員に見本となる授業を見せることから始めた。見本としたのはベテラン教員ではなく、同じ若手で昨年度までの学びを表現できる教員が行うこととした。これは、授業を見る視点が明確になり、すぐにでも真似をすることができることから、今後、若手教員が授業をしていく上での指標にもなると考え、第1回目の研究授業として設定した。

当該教諭の授業は、昨年度の学びを踏襲し、指示や教師の立ち位置、板書など授業に対する意識が明確な授業として展開されていた。今回のこの授業を参考に、授業を見るポイントとして「教師の発言（発問・指示）」「教師の視点（机間指導など）」「授業規律」「板書」を設定し、授業者もそこにこだわってできるよう今後の方針を示している。

【第2回研究授業】平成30年10月25日(水)6限目 授業者：新田 真子(2年目教員)
 学年・教科領域： 第6学年 道徳科
 教材名：「言葉のおくりもの」B(10)友情、信頼
 展開：

学習活動・内容	
導 入	①よい友達について考える ○友達ってどんな人ですか ②範読 内容を振り返りながらあらすじをつかむ
展 開	③話し合う ○「余計なことをするな。さっさと帰れ。」と一郎はどんな気持ちで言ったのでしょうか ○「気にしない。気にしない。」とたかしを励ますすみ子を見て一郎はどんなことを思ったのでしょうか ◎「言葉のおくりもの」を聞いて、たかしやクラスみんなはどういう気持ちで拍手を送ったのでしょうか
ま と め	④今までの生活を振り返る ○よい友達であるために、どんなことが大切だと思いますか

第2回目の研究授業は、第1回目が続いて昨年度から引き続き研究を行っている初任2年目教員が実施した。昨年度からの成長を確認するとともに、前回提示した授業を見るポイントについて、若手教員とともに確認を行った。

【第3回研究授業】平成30年12月12日(水)6限目 授業者：山本 郁哉(初任者教員)
 学年・教科領域： 第5学年 道徳科
 教材名：「オーストラリアで学んだこと」B(9)礼儀
 展開：

学習活動・内容	
導 入	①「礼儀」について考える ②めあてを確認する あいさつの大切さについて考えよう
展 開	③範読 ④話し合う ○突然のあいさつに私はどう思ったのでしょうか ○次の日、あいさつができたときどんな気持ちだったのでしょうか ◎見ず知らずの外国人が、小学生の私にあいさつをしてくれたことに対して、私はどんなことを考えたのでしょうか
ま と め	⑤本時の学習を振り返る

第3回目の研究授業は、今年度新規採用となった教員による授業である。これまでの2回の授業を見て、授業者としての所作や授業づくりの必要性については一定の理解の元、本授業に臨むことができた。授業準備にあたっては、ミドルリーダーの教員からアドバイスも得ており、組織としての成長も窺える。

【第4・5回研究授業】平成31年1月23日（水）

5限目 授業者：松本 奈穂（講師）

学年・教科領域： 第1学年 道徳科

教材名：「二わのことり」B（6）思いやり

展開：

	学習活動・内容
導 入	①「友達」について考える ○今までに友達と仲良くできたこと、仲良くできなかったことはありますか ②めあての確認 みそさざいの気持ちを考えよう
展 開	③範読 ④話し合う ○みそさざいは迷っていたのに、どうしてうぐいすの家に行ったのでしょうか ◎みそさざいはうぐいすの家でどんなことを思っていたのでしょうか ○みそさざいはうれしそうなやまがらを見てどう思ったのでしょうか
ま と め	⑤本時の学習を振り返る ○みそさざいの良いところはどんなところだと思いますか

6限目 授業者：三原 彰浩（講師）

学年・教科領域： 第3学年 算数科

教材名：「小数」

展開：

	学習活動・内容
導 入	①前時の復習 ②めあてを確認する 水のかさ以外にも小数を使って表してみよう
展 開	③問題提示 ・テープの長さは何 cm といえよいのですか ④問題把握・既習事項の確認 ⑤問題解決 ⑥問題提示 ・1.2Lは何L何dLですか ⑦問題把握・既習事項の確認 ⑧問題解決

ま	⑨まとめ
と	⑩適用題
め	

第4・5回目の研究授業は、講師の2人が実践した。両名とも今年は担任をもっていないが、教科授業を担当しており、授業実践を積み重ねてきている。学年最後に講師の2人が研究授業を行ったのは、来年は担任業務を果たすことができるよう、より一層授業力を向上させることを目的としたためである。特に1年生では、授業実践に向け学年教員が協力をして授業展開や板書作りにアドバイスを与えることができたので、授業力を向上させるためにはいい機会とすることができた。

4. おわりに

昨年度に引き続き、若手教員の授業力向上に向けた研究を図ってきたが、成果の一つとして、今年の研究構成メンバーが、昨年度のメンバーに今年度の新規若手教員を加えて構成できたことがあげられる。昨年の若手教員は、一年間研修してきた成果を生かした授業をつくるとともに、今年度の若手教員の見本となるべく授業に臨むことができていた。実際に、今年度の研究はじめは、昨年度の若手教員から研究授業を開始し、今年度の若手教員に対して「授業への心得とは何か」を示すことができていた。この実践は、後半に授業を行った新規若手教員にとって、授業実践に向けてのより明確な指標となり、授業力向上に効果的に位置づけることができた。このように、昨年度の教員と新規若手教員の相互により刺激が与えられ、効果的に成長を促すことができたと言える。

また、コーディネートを担った教員についても、昨年度から指導の方針を把握しており、自ら積極的に若手教員に関わりの確な指導をすることができていた。特に、新規若手教員に対しては昨年度からの指導の経過を伝えることで、本研究の成果を効果的に進めることができたと言える。今年度については、教職大学院の院生が本校に在籍しており、研究課題である道徳科の授業では本研究に積極的に参加し、実践研究にもつなげることができていた。